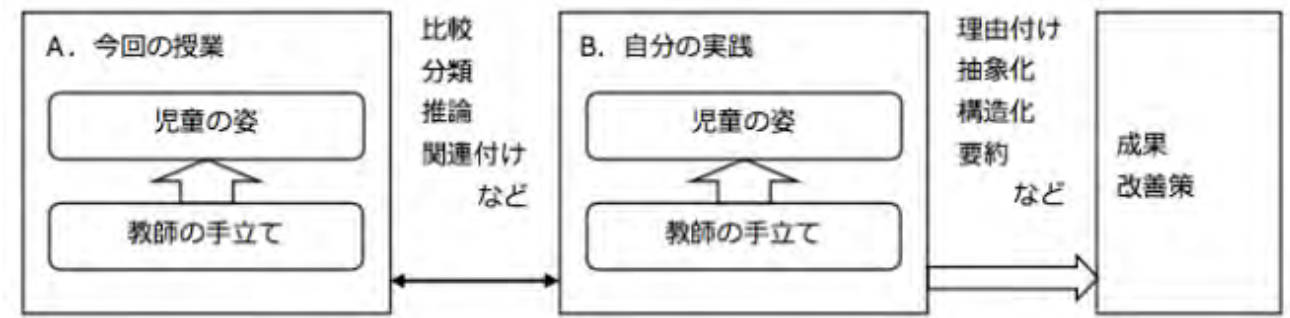


※文字の大きさは Meiryō UI / 12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、(写真 1) (表 1) などと文中に記載し、右ページに(写真 1) (表 1) などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

【様式 1】

＜エントリーシート＞	部門	学校名・氏名
※事務局記入欄	校内研修部門	岐阜大学教育学部附属小学校
No. : C - 14	活動名	主体的に参加する授業研究 ～子どもの事実はマネジメントの宝～
課題の設定 :		
若手教諭の増加、本校勤務年数の短い教員増加ということから、議論が深まらない、授業成果が確認できない授業協議会が続いていた。そこで、授業提案にとどまらず、授業協議会を改善するとともに、他校との協働を促すことで、参加した教師が授業力の向上を自覚できる実践研究となると考え実施している。		
方針・計画 :		
研究意図を提示し、参加者に共通理解を促すことによって、授業者の計画に沿った意見を述べることであったり、議論を深めたりすることができる。授業場面では、参加者は抽出した児童を見取り、その様子を交流し合う協議の場を設定した。児童の姿から学ぶ時間を取ることで、主観的な意見の言い合いになることのない議論が展開できる。協議会後には、全体の意見を推進委員会によって、振り返りとまとめていく。		
活動内容 :		
- 研究推進委員会にて、「全校研究会の考え方」(資料 1)を作成。提案授業と自分の実践を関連付け意見をもって参観分析が可能とした。提案授業の前時は、自由参観の時間として設定。 「全校研究会の進め方」と指導案を関連付け、研究授業を観る視点や記録の取り方を確かめることで、授業分析力を高める。同時に、抽出児を追うことで子どもの思考の流れを学び合った。 - 研究協議に向けファシリテートの仕方、ホワイトボードのまとめ方など、教師の能力向上ももてる。 - 市内の公立学校と協働の授業研究会とし、他校の授業力向上の場とした。他校の教師の多様な視点を得て、それを改善に活かすことで、よりよい研究会になることを目指した。		
活動の成果 :		
参加者は、教職経験年数に関わらず、授業の児童の姿を根拠に、手立ての良し悪しや改善策等を述べるできるようになった。子ども一人一人を見取ることの重要さを、職員一人一人が感じることができた。グループのファシリテーターは研究会の論点から外れることなく、議論を進めることができ、発表者もグループの意見を要点を絞った発表ができた。 (参加者より) - 授業者の指示・意図と子どもの姿をじっくり見つめられて、改めて児童理解の大切さを実感した。 - 自分の実践と比較しながら話したり、「○○(教科)でいうと、△△ってこと」と教員らしく自分が実施するときにはとか、自分の教科に置き換えて話をしたりすることができるようになった。 「全校研究会の考え方」が事前に示され、授業者の計画意図を意識した参観ができるようになった。 - 参加者が共感的に聴いてもらえる雰囲気があり、若くても話しやすく意見が言いやすい。 - 児童の様子とそれに関わる働きかけが、付箋で俯瞰でき、授業から研究の視点が明確になる。		
アピールポイント(アイディアや工夫) :		
- 附属の校内授業研究会を公開し、地域の学校の協働の授業の場とする。 - 協議方法や資料、授業資料等は、他校の授業研究会でも活かせるように公開している。 - 経験年数の若い教師と、中堅の教員が、授業中の児童の思考の見取り方を小グループで交流できる。 - 授業改善の方法が、PDCAサイクルに乗せやすく、授業者も次時から修正を試みることができる。 - 誰もが参加しやすい開かれた研究協議の場であり、公平に意見を取り扱える。		

資料 1 「全校研究会の考え方」(一部)に記された授業研究と日々の自分の授業との関連



資料 2



抽出児童の実態からみられた様子を付箋に記してホワイトボードミーティング。



ファシリテーターを中心とした授業分析の観点と実態からみられる分析の話し合い

資料 3 「全校研究会の考え方」(一部)に記されている授業改善への方向性。

☆ 全校研究会では、子どもの学びの事実を根拠に、その背景を探る推論を重ねていくことが重要となります。事実と推論、改善策を関連させながら、考え(意見)を組み立てていきましょう。

子どもの事実 (見たまま)	→	事実の見取り (～はできていた) (～はできていなかった)	→	推論 (～という手立てからできた。) (～が原因でできなかった。)	→	改善策
------------------	---	-------------------------------------	---	---	---	-----

☆ 全校研究会で発言をするためには、自分の実践の幅(意図を明確にした手立て、児童の実態把握)を広げておくことが大切です。(普段の授業でどれだけ意識して行えるかが問われます。)

☆ 全校研究会を単なる授業研にはしてはいけません。授業研とは、授業における児童の姿や教師の手立てのみで議論を進める様子です。全校研では、自分の実践における児童の姿・教師の手立てと照らし合わせて、共通点・相違点などを見出して意見を作っていきます。

☆ また、空中戦になってもいけません。空中戦とは、児童の姿から離れ、定義や言葉の解釈、理論だけで議論を進める様子です。あくまで、「目の前にいる児童の姿」をベースに議論を進めなければなりません。

☆ 教師(指導観)と教材(題材観)と児童(児童観)をよく理解してから臨みましょう。新しい試み(教材・題材)を行っているのに、従来の題材観を持ち出して話し合うのはナンセンスです。相手の土俵に上がって(教材・題材を理解した上で)、建設的な話し合いにしていきます。

☆ 「発達の段階(発達段階)に合わせて手立てを変えていく必要がある」と一口で言っていますが、この具体をきちんと示したいものです。(つまり、発達の段階を事前に学んでおく。例えば、メタ認知能力は一般的に中学年以上から発達していく など。)

→ 「○年生では、～な姿(～である)という発達の段階(発達段階)を踏まえ、～な手立てを仕組みとよいのではないか。」